様式Ｃ－１９

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成２５年　５月　９日現在

機関番号：15301
研究種目：若手研究(B)
研究期間：2010～2012
課題番号：22720267
研究課題名（和文）
１０～１３世紀ユーラシア東方における外交儀礼と国際秩序
研究課題名（英文）　Ritual of Diplomacy in Eastern Eurasia during Multistate Era Of the Tenth to the Thirteenth Centuries
研究代表者
古松　崇志（FURUMATSU Takashi）
岡山大学・大学院社会文化科学研究科・准教授
研究者番号：90314278

研究成果の概要（和文）：
10～13 世紀のユーラシア東方は、複数の国家が並立する多極化の時代であった。本研究は、各王朝間で盛んに往還した外交使節がそれぞれの朝廷でとりおこなった儀礼の体系的な研究である。とくに豊富な文献史料が残る契丹・北宋間、金・南宋間を中心に、西夏や高麗も視野に入れ、外交使節がとりおこなった儀礼を詳細に復元し、外交使節の相互派遣がユーラシア東方の比較的安定した国際関係の維持に果たした役割を明らかにした。

研究成果の概要（英文）：
The tenth to thirteenth centuries in Eastern Eurasia were an age of multipolarization in which several states coexisted. This research presents a systematic study of the rituals performed by the diplomatic missions that travelled back and forth with considerable frequency between the different dynasties during this period. Focusing in particular on the embassies that travelled between Khitan and the Northern Song and between Jin and the Southern Song, regarding which there has survived an abundance of written source materials, and also taking into account Xixia and Koryŏ, this research reconstructs in great detail the rituals performed by the embassies and clarifies the role that the reciprocal dispatch of embassies played in maintaining comparatively stable international relations in Eastern Eurasia.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
２０１０年度	1,200,000	360,000	1,560,000
２０１１年度	1,000,000	300,000	1,300,000
２０１２年度	1,000,000	300,000	1,300,000
総　計	3,200,000	960,000	4,160,000

研究分野：ユーラシア東方史
科研費の分科・細目：史学・アジア史・アフリカ史
キーワード：澶淵の盟、外交儀礼、賓礼、外交文書、契丹、宋、多国体制

１．研究開始当初の背景

最近、研究代表者は、澶淵の盟の締結について、モンゴル帝国によるユーラシア統合まで200年ほど続くユーラシア東方の多極化時代における国際秩序の維持に対し決定的に重要な機能を果たしたものとしてとらえ、この

盟約にともない定められた歳幣や国境遵守をはじめとする平和維持のための規定や、皇帝家どうしの擬制家族化、外交儀礼・管理貿易・外交文書といった諸制度など、両国が対等な国家として共存するための仕組みとその仕組みを軸としてユーラシア東方において維持された国際秩序の双方を包み込んで「澶淵体制」と呼ぶことを提唱した。ただし、この仮説を発表した論考は「国境」を主題とするもので、紙幅の都合でその内実について詳論するゆとりはなく、研究開始の段階では提言のレベルにとどまっていた。「澶淵体制」なる概念をさらに練り上げていくべく、研究代表者は、平和維持の仕組みにおいて根幹をなす両国間のコミュニケーションのありかたに着目して研究に着手した。とくに両国間の政府レベルでのコミュニケーションのうち最も高次で重要な制度として、皇帝の代理人として毎年派遣される国信使と呼ばれる外交使節団について中心にとりあげることにした。

契丹・宋間の国信使については、つとに中国の聶崇岐、傅楽煥が両国国信使の人名表を作成し、その行程路、接待の方法、国信使が持参する国書の書式などを明らかにし、ドイツのHerbert Frankeが北宋・南宋を通じた国信使の包括的な研究をおこなった。これらの先駆的な研究により国信使に関して基本的な事柄が明らかにされてきたにもかかわらず、国信使のおこなう外交儀礼については、わずかに聶崇岐が『宋史』礼志にもとづきその手順を表面的に追うのみで、詳細な研究は手つかずであった。そうしたなか、唐代後半から北宋までの外交儀礼の変遷をあとづける研究も近年現れはじめ、契丹・宋間の儀礼に両国関係の対等性が現れていることなどが明らかにされたものの、主眼は唐から宋への制度変遷にあって契丹・宋関係になく、また儀礼そのものの分析も多分に検討の余地を残している。

２．研究の目的

本研究は、史上に名高い1004年の澶淵の盟締結以後、120年にわたり平和共存した契丹（遼）・宋の両国が、友好関係を確認する目的で毎年の正旦・聖節（皇帝・皇太后の誕生日）を祝賀するべく互いに派遣した国信使の制度についてとりあげる。両国朝廷での皇帝・皇太后と使節団の対面儀礼をはじめとする一連の外交儀礼制度を中心に、その起源、制度確立の過程、儀礼の内容の詳細、後代（金・北宋、金・南宋、モンゴル時代）への影響と制度変容の過程などを解明し、多極化したユーラシア東方の国際秩序維持のありかたを明らかにしようとするものである。

３．研究の方法

本研究では、契丹・宋間の外交儀礼のうち最も重要な皇帝・皇太后と国信使使節団の対面儀礼や宴会儀礼にかんする詳細な規定について記した文献史料について、文献学的な研究をすすめる。そのうえで、外交儀礼を記したテキストそのものを校訂しながら、儀礼の詳細を復元する基礎作業をおこなう。この作業をふまえて、これまで当該分野ではほとんど試みられていない人類学的な儀礼研究の手法も参照し、国信使の外交儀礼におけるひとつひとつの身振りや動作を分析し、身振りが表す意味を考察し、さらには儀礼の全体の流れを分析してそれが総体として何を表しているのかを読み解く。また、契丹・宋双方の朝廷における儀礼がおこなわれる時と場の検討をおこない、それぞれの国家の政治活動における外交儀礼の位置づけを時間・空間の側面より明らかにする。さらに、宋にやって来る契丹国信使に対し自国の風俗に則った独自の拝礼や服装が認められていた点について、後

述するようにモンゴル時代以後の中央ユーラシアにおける儀礼もあわせて検討し、唐代からの連続性を持つ中国王朝の儀礼体系の枠に収まらない中央ユーラシア遊牧民のあいだで古くからおこなわれていた儀礼の要素にも着目して研究を進める。なお、契丹・宋間の外交儀礼を複眼的な視点から検討するべく、前代の唐代の外交儀礼や同時代の他の外交儀礼との比較をおこなう。このような比較の視点を取り入れることをつうじ、契丹・宋間国信使の外交儀礼の特質を浮き彫りにし、儀礼が象徴する両国関係を明らかにする。

つづいて、マンチュリアより勃興した女真族の金国の登場により、契丹・宋間の平和共存の関係が崩壊し、ユーラシア東方情勢が大きく変動した12世紀前半以後、金と契丹、金と北宋、金と南宋のあいだで、王朝間関係の変化にともない外交儀礼がいかに変容したかについて考察する。金・南宋間の国信使制度とその外交儀礼については、南宋時代の文献に豊富に残る関連史料を用いて、詳細に明らかにすることが可能である。王朝断代史の枠を越えて契丹・北宋関係からの影響について考察する。

さらに、史料が比較的豊富な13世紀のモンゴル時代以後のユーラシア諸王朝の儀礼にかんする文献や研究も広く参照し、10〜13世紀ユーラシア東方の外交儀礼の特質と歴史的意義について理解を深めたい。

４．研究成果

以上の研究方法にもとづき、関連する文献史料を収集し、契丹・宋間の国信使制度と両国朝廷でとりおこなわれる儀礼（賓礼）を詳細に分析することにより、前代の唐代にくらべて研究の立ちおくれた10世紀以後のユーラシア東方の外交儀礼について体系的に解明した。それはたんなる制度研究にとどまらず、各国朝廷における政治活動のなかでの外交儀礼の位置づけを時間・空間の側面より明らかにする試みでもあり、そうした研究視角により、契丹・北宋、金・南宋間の外交儀礼の持つ重要性を具体的に明らかにすることが可能となった。10世紀以後のユーラシア東方の国際関係は、従来、国家間の実際の交渉過程をあとづける政治史の手法や歳幣・交易などに注目した経済史的側面などから主に研究が進められてきた。これにくわえて本研究での分析・検討にもとづき、人びとの秩序意識を象徴する儀礼の研究という新たな視点を取り入れて多極化した当該時代の国際秩序をこれまでとは異なる角度から再検討したことで、この時代のユーラシア東方の多国体制の特質の理解に資することになるだろう。さらにこの時代の外交儀礼を中国史の儀礼制度の流れのなかに位置づけるだけでなく、北方王朝（契丹・金）と中国王朝（両宋）との相互の双方向的なコミュニケーションのありかたの解明を目指す視点から、外交儀礼における契丹・金側の国信使使節団の独自の儀礼作法にも着目し、モンゴル時代以後のユーラシア諸王朝における儀礼もふくめて通時代的に比較検討をおこなった。その結果、従来ほとんど等閑視されてきた北方遊牧国家の儀礼の系譜についても新知見を得ることができた。以上の成果は現在論考としてまとめているところで、ちかく公刊の予定である。

澶淵の盟成立後の契丹・宋二国間のコミュニケーションを考えるうえで、外交儀礼と並んで重要なのが外交文書のやりとりである。通常時は中央政府間で直接交渉することはなく、基本的には国境沿いにある両国政府の地方出先機関どうしでの文書のやりとりをつうじておこなわれた。本研究ではこの文書による交渉についての研究にも取り組んだ。国境付近の出先機関間での「牒」という種類の文

書をやり取りする制度の確立と運用について解明し、それがのちの金・南宋間やモンゴルの外交文書制度に及ぼした影響を論じた。

以上のような特定のテーマについての実証研究をふまえて、より大きな視点から時代像を提示するべく、10世紀から13世紀のモンゴル登場以前までの多極化時代のユーラシア東方の国際情勢について、契丹の動向を中心とした概説論文を発表した。さらに、多極化時代のユーラシア東方の国際関係にかかわるこれまでの国内外の研究動向をまとめたうえで、今後の研究の課題と展望を示した。

そのほか、本研究でとりくんだ儀礼研究の一環として、契丹皇帝の喪葬儀礼についての研究もおこなった。『遼史』礼志をはじめとする文献史料に記された儀礼の内容を、考古資料や現地調査の成果も参照しながら読み解いた結果、喪葬儀礼をおこなう施設や器物などに唐制の影響が明確にみられるものの、殯（もがり）や埋葬装束、山陵へ向かう途中におこなう遺品の燃焼や動物供犠・会食をともなう祭祀、皇帝自身が墓室まで柩を導く埋葬、埋葬後におこなう祭祀など、喪葬儀礼の中核部分は契丹独自の風俗を色濃く残すものであることが明らかになった。そして、この喪葬のありようから、契丹王室は遊牧民である「契丹」としての自己同一性を一貫して保持し続けたことも判明した。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計６件）

①古松崇志、十～十二世紀における契丹の興亡とユーラシア東方の国際情勢、アジア遊学、査読無、160号、2013年、pp. 8-20

②古松崇志、10～13世紀多国並存時代のユーラシア東方における国際関係、中国史学、査読有、21巻、2011年、pp. 113-130

③古松崇志、契丹皇帝の喪葬儀礼―聖宗文殊奴の喪葬儀礼と慶陵埋葬を中心に―、遼文化慶陵一帯調査報告書（京都大学大学院文学研究科）、2011年、pp. 1-62

④古松崇志、法均与燕京馬鞍山的菩薩戒壇――大乗菩薩戒在契丹（遼）的流行、遼金歴史与考古（遼寧教育出版社）、査読無、3輯、2011年、pp. 245-262

⑤古松崇志、破解慶州白塔建立之謎――11世紀契丹皇太后奉納的仏教文物、遼金歴史与考古（遼寧教育出版社）、査読無、2輯、2010年、pp. 214-234

⑥古松崇志、契丹・宋間における外交文書としての牒、東方学報京都、査読有、85冊、2010年、pp. 271-301

〔学会発表〕（計４件）

①古松崇志、慶州白塔建立に込めた章聖皇太后の祈り――契丹王族と仏教信仰――、特別展「草原の王朝契丹」講演会、2012年2月19日、静岡県立美術館

②古松崇志、鳥居龍蔵の契丹遺跡調査――内モンゴルで遊牧王朝の足跡を追う――、鳥居龍蔵記念博物館開館1周年記念特別陳列「鳥居龍蔵の見た北東アジア」記念講演会、2011年11月23日、徳島県立博物館

③古松崇志、慶陵と慶州白塔――契丹・章聖皇太后の祈りと生涯――、九州・シルクロード協会交流会：特別展「草原の王朝契丹」記念講演、2011年10月16日、九州国立博物館

④古松崇志、仏教石刻よりみた契丹燕京地方の塩政と商業、第４回石刻合同研究会、2011年7月30日、明治大学

〔図書〕（計１件）

①中尾正義編、勉誠出版、オアシス地域の歴史と環境：黒河が語るヒトと自然の2000年、

2011年、296頁（分担執筆pp.117-160, pp.161-171）

６．研究組織

(1)研究代表者

古松　崇志（FURUMATSU Takashi）

岡山大学・大学院社会文化科学研究科・准教授

研究者番号：90314278